

民俗博物館だより

Vol. 42 No. 1

2017. 3. 24



水車踏み (大和郡山市筒井町)

目次

資料紹介 揚水車・踏車について.....	1
特別展「奈良さらしー南都の名産ここにありー」.....	4
常設展「昔の暮らし」リニューアルー成果と課題ー.....	5
みんなく春夏秋冬 平成28年度の活動報告.....	8

〈資料紹介〉

揚水車・踏車について

溝辺悠介

踏車について

踏車は、車の上に人が立ち、足で踏み込むことにより車を回して水を汲み上げる揚水車である。主に灌漑用水の水位より高い田に水を汲み上げる農具として用いられてきた。文政5年(1822)に刊行された『農具便利論』では、各部材の図が詳細に描かれており、およそ200年前には現存する踏車とほぼ変わらない形が完成していたことがわかる。また同書によると、寛文年中に大坂農人橋の京屋清兵衛・太兵衛が踏車を開発し、世に広めたとも書かれている。踏車は本州全域、四国、九州と全国的に広がり、各地の博物館・資料館等で見ることができる。

奈良県立民俗博物館では46台の踏車を収集し保管しているが、平成26年から28年にかけて実施した資料整理作業において、内30台の紀年銘などの情報をまとめることができたため、報告したい。

踏車の先行研究

民具研究史上、踏車が調査研究されている例は数例しかなく、全国的な調査はいまだされていないのが現状である。地域ごとに事例調査した例は、石川勝也氏の産業史としての研究が詳しい。愛知を中心とした中部圏の事例や、九州一円の事例を地域ごと何本かの論文にわけて報告されている。また、全国的な概要としては前田清志氏の「日本の踏車について」が挙げられる。

踏車の構造

踏車は足で踏んで回る車と、水を汲み上げる流路となる鞞箱に分離でき、鞞箱支柱の軸受けに車の車軸がはめこまれる。車の直径は約100cmのものから200cmのものまで様々である。『農具便利論』では四尺五寸、五尺、五尺五寸の三種類と、その他にそれ以上の大きさの大車、手で回す小車が紹介されている。

足で踏む部分にはマクラと呼ばれる足のせが取り付けられる。マクラの間隔＝羽根板の間隔は車直径が変わっても一定につくられており、これは人が踏み込む歩幅に合わせてつくられているため、車直径が大きくなればなるほど羽根板数が増える。マクラの間に棧を渡している踏車があるが、これは九州地方や河内で生産された踏車の特徴として挙げられる。芳井敬郎氏の調査によれば、足休めや構造上の強化のために棧が

取り付けられるようになったとのことである。

博物館所蔵資料からみる踏車の特徴

奈良県立民俗博物館で所蔵する踏車の一覧を表1にまとめた。所蔵資料から奈良県下の特徴を挙げるとすれば、銘文・墨書が記された資料の多さが第一に挙げられる。他の地域では踏車に墨書が残されている例は少なく、先行研究においても紀年銘の報告例は少ない。墨書は鞞箱側面と車羽根板に書かれているものが多く、踏車を購入した際に購入者が購入年と自身の名前を書きこんだものと考えられる。紀年銘があるものは14点と半数近くにのぼる。中でも一番古い慶應4年の資料は芳井氏の論文でも取り上げられているが、先行研



上：慶應4年紀年銘の踏車 下：「宇吉」銘墨書

究をみる限り日本で最も古い踏車の資料として紹介できる。紀年銘14例をみると、一番新しいものでも昭和22年で、慶應4年から約80年のタイムスパンに収まる。戦後、取水・排水装置としては、発動機を動力源とするバーチカルポンプが台頭してくるため、これら紀年銘を持つ踏車資料は、一地域での踏車の変遷をみる上で、よく揃った資料群となるのではないだろうか。

踏車の製作人・製作地について

踏車を製作する職人に関して、表1でみると、13台の踏車に屋号や名前がみられる。在地の職人銘がみられる一方、大阪の職人銘も比較的多い。北河内の諸福（現大阪府大東市）は踏車を製作する船大工が多く軒を連ねていた地域で、諸福で生産された踏車が生駒郡から収集されている。

1) 唐箕屋宇吉

K7850の踏車に書かれる職人銘で、住所は北葛城郡高田本町となっている。屋号が「唐箕屋」とあるように、唐箕も製造していた職人で、当館所蔵の唐箕のなかにも「唐箕屋宇吉」の墨書をもつものが確認できる。芳井氏の論文のなかでも、踏車の製作人が、龍骨車や千石通し、万石通し、唐箕などの農具を多様に製作していたことがわかるが、実資料においてもそのことが確認できる。

2) 京屋太兵衛

Z2386の踏車は『農具便利論』に記述のある大阪農人橋京屋の墨書がある。京屋の踏車資料は全国的にも2例しかなく、3例目の資料として紹介できる。大阪においては、後述の諸福周辺で生産された踏車の現存率が非常に高く、京屋の踏車が残されている例がない。奈良以外の2例とも大分県立歴史博物館が収集したもので、大正年間の紀年銘を持っている。今後、紀年銘や流通の問題を考える上でも、京屋が製作した踏車の検証は必要とされる。



「京屋太兵衛」銘の踏車



諸福「大佐」銘の踏車

3) 大佐

Z2372や9-170にみられる銘文は諸福の周辺の職人で、諸福周辺は踏車や舟を製作する職人が10軒以上確認される。諸福周辺はもともと低湿地帯であることと、江戸中期新田開発以降の井路整備のため、船大工が多く軒を連ねていた。また、洪水等で排水のために踏車を必要とした地域でもあり、踏車の需要が高く、供給側もその地域周辺に集まったものと考えられる。

以上のように、奈良県立民俗博物館所蔵の踏車資料を一覧すると、収蔵点数、銘文情報とも多く残されており、製作技術、使用法、流通など多面的に研究できる材料であると言える。今後さらに詳しく調査をし、あらたな報告ができるよう努めたい。

本文をまとめる上で、平成26年から2年間の資料整理作業の成果が大きく影響しました。作業にあたった6名の方々に厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- 前田清志「日本の踏車について」『玉川大学工学部紀要』17号、1982年
李家正文『水車史考』、1990年
大東市立歴史民俗資料館図録『特別展近世大東の新田開発—大和川の付替えと深野池—』、1990年
竹内智志、大熊孝、小野桂、知野泰明「江戸時代中期に登場した人力揚水機「踏車」に関する研究—その揚水能力と近世土木技術に与えた影響—」『土木史研究』19号、1999年
石川勝也・石川恭子「九州地方に保存の踏車」『産業遺産研究』9号、2002年
芳井敬郎「龍骨車・踏車研究—湖東平野・奈良盆地の利用状況—」、「農具商についての民具論的考察—特に大阪を中心として」『民俗文化複合体論』、2005年
橋本貴明「流通民具の形態差と規格化—大阪府枚方市の踏車を素材に—」『民具研究』148号、2013年

表1 計測銘文一覧(単位mm)

番号	車直径	羽根板縦	羽根板横	羽根板間距離	踏板数	運搬穴	紀年銘	銘文部位	記載方法	銘文・墨書
Z2195	2140	310	235	350	19	なし	1876	箱左側面	墨書	明治九歳子六月／細工大和國[]
Z2383	1830	380	230	350	16	なし		箱左側面	墨書	和口口郡[]／細工大坂屋清口
Z2384	1800	370	230	350	16	なし	1912	箱左側面	墨書	田原本新町細工人口口／大極上々請合六尺／新式口抜水車
Z2375	1700	400	240	360	15	なし		羽根板	墨書	大正元子年大西芳太郎八月買求之
Z2380	1700	380	230	340	15	なし		箱左側面	墨書	大極上々請合細工人[]
Z2440	1680	390	235	340	15	なし	1907～	箱右側面	墨書	口口徳藏
K9003	1670	390	235	340	15	なし		羽根板	墨書	明治四拾口年式口口口 徳藏所有
K867	1670	370	240	340	15	なし	1893	箱左側面	墨書	昭和村額田郡南口堀川口治郎所有
Z113	1660	390	230	350	15	なし	1940	羽根板	墨書	不明
K9139	1660	380	240	350	15	なし		箱左側面	墨書	明治廿六歳口口上旬新調口市郡口口口口向殿
Z2370	1660	380	235	330	16	なし		羽根板	墨書	昭和拾五年口月新調／瀬南村古寺瀧井小三郎所有
K29733	1660	370	230	340	15	なし		箱左側面	焼印	昭和拾五年五月新調瀬南村大字古寺瀧井小三郎所有
Z2385	1650	370	250	340	15	なし		箱右側面	墨書	口口吐田
Z2386	1640	365	240	340	15	なし		箱左側面	墨書	法口寺[]
K7850	1630	380	230	340	15	なし	1868	箱右側面	墨書	口口新七
Z2387	1625	370	230	340	15	なし		羽根板	墨書	慶應四
K13387	1610	370	235	340	15	なし	1894	箱左側面	墨書	慶應四辰年乃六月依本口屋新七求之
Z2371	1600	380	230	350	14	なし		箱左側面	墨書	明治廿七年口口五月新調／大坂農人橋東詰／本家京口太兵衛／製造所
Z112	1520	380	230	330	14	なし		箱左側面	墨書	北葛城郡高田本町五丁唐箕屋宇吉／土庫／西川田松
Z2372	1500	340	240	330	14	なし	1918	箱左側面	墨書	大正七年七月改
K7897	1500	340	235	330	14	なし	1947	箱左側面	墨書	磯城郡平野地大字葉王寺中川梅吉所有／昭和貳拾貳年四月吉日新調
Z2494	1460	350	240	330	14	なし		羽根板	墨書	諸福／大佐
16-226	1350	340	220	340	13	なし	1915	支柱	焼印	諸福／大佐
K13136	1520	370	240	340	14	なし		羽根板	墨書	大正貳年伊豆條村中尾
Z2495	1520	365	235	330	14	なし		箱左側面	墨書	生駒郡安堵村[]／井上政太郎
Z2496	1700	380	230	350	15	なし	1929	箱右側面	墨書	昭和四年／八月上[]
Z2497	1720	330	235	320	16	なし		箱左側面	墨書	奈良縣磯城郡川原村大字口口松村万吉所持／大極上[]／大正九年参月中旬
9-170	1760	340	235	350	16	あり	1920	箱左側面	焼印	元八尾新町／根元大清製
Z2498	1660	390	230	320	16	なし		箱左側面	墨書	多[]村宮之森
Z2499	1660	350	240	320	16	なし		箱右側面	墨書	石田／森本／松村／供有
								羽根板	墨書	宮森松村森本石田供有
								箱左側面	焼印	柏原／永原屋／徳兵衛
								支柱・車軸	焼印	河内／諸福／大要
								箱左側面	墨書	請合法隆寺並松唐箕屋縹市／昭和十六年四月新調／松山伊蔵
								箱右側面	墨書	瀬南村大字古寺／松山勝藏共有
								羽根板	墨書	昭和十六年四月松山伊蔵松山勝藏共有瀬南村大字古寺164(アラビヤ数字は異体字)
								支柱	焼印	[]／大勝

平成28年度の展覧会

奈良さらし —南都の名産ここにあり—

横山浩子

奈良さらし(晒・曝)とは

麻といえば、まず庶民衣料素材の代表というイメージが浮かぶ。しかし近世、その概念とは全く異なる麻布があった。絹の縮緬、紗綾、綸子、羽二重(これらは当初は輸入布として日本にもたらされていた)などと並び、支配階層の人々が着用する呉服物として扱われた「さらし布」、その「第一」とされた奈良晒(曝)である。

越後、越中、近江など他の麻布産地に先駆け最も早くその生産体制を確立、「諸大名様方、御旗本様方、御上下地、御帷子地、御幕地」などとして用いられ、幕末期に至るまで「帷子、三都士民ともに式正には奈良晒麻布の定紋付を用ふ」とされた江戸時代を通じての一大ブランドであった。幕府の御用布としてその保護・統制を受けつつ、江戸時代の前半期はほぼ市場を独占していたとあってよく、延宝～享保年間(1673～1735)を最盛期とし、特に17世紀後半には、年間生産量は40万疋を超えるほどの盛況を示した。十のうち九とまでいわれる人々が何らかの形で関わる「南都一統の業」であった。

奈良さらし展再び

奈良晒については、既に社会経済史の立場からの木村博一氏の研究、紡織技術史を主眼とする芳井敬郎氏の論考などがあり、その学恩に浴することができる。^{*}しかし、現在奈良でその面影を偲ぶことは難しいし、この布自身について、これまで殆ど顧みられることはなかった。それは長い間、奈良晒布と確定できる江戸時代の実物資料が殆どなく、その縁を求める術がなかったことにもよろう。

しかし近年、近世麻布研究所の吉田真一郎氏によっ



寧楽美術館会場での展示

て、膨大な資料収集に基づく近世麻布の産地の識別方法の確立、繊維と糸の分析による各産地の特質、これらを踏まえた産地間の比較に及ぶ研究が精力的に進められている。当館では平成12年、吉田氏の協力を得て『奈良晒近世南都を支えた布』を開催、近世奈良晒について初めて正面から取り上げ、奈良晒の実物布を公開したところであるが、今回の展示は、近世麻布文化という視点からその後の研究の進展を踏まえたものである。

奈良晒の証となる幕府公認の「南都曝・・・」朱印、「なら町年寄」印等の押印布を中心に構成、前回は9件だった実物布の資料は江戸期のもの24件、明治期以降6件となった。印形の変遷や近江布に捺された類似朱印との比較など、布に捺す印判の意味についての理解も深化している。また、前回公開した「大殿様御召料平御帷子晒地帷子切本」(吉岡幸雄氏蔵)に加え、幕末期の「夏物切見本」(近世麻布研究所蔵)やこれまで殆ど知られていなかった奈良島(縞)「紀ノ半仕着切」(京都生活工藝館無名舎 吉田孝次郎氏蔵)など今後の研究の起点となる基準資料を初公開することができた。さらに、宮崎明子氏(古代日本茜染研究所)、澤田絹子氏(奈良芸術短期大学講師)の協力により当時の紡織技術、晒し技法について検証し、実験布の展示や大和機によるワークショップなどを通じて公開した。これらの試みは実物布に基づく実証的研究の可能性の一端を示すものである。

なお、本展示は、当館、公益財団法人名勝依水園・寧楽美術館を会場とし、さらに奈良県指定無形文化財「奈良晒の紡織技術」の認定団体である奈良晒保存会(株式会社岡井麻布商店、坂西麻布奉織所、株式会社中川政七商店)ならびにその技術伝承を担う月ヶ瀬奈良晒保存会が「奈良さらし」展開催実行委員会として連携協力し、開催したものである。

名勝依水園は、県内屈指の名庭園であるが、所在する水門町にかつて晒し場があり、奈良晒商人が別邸として設立・整備した奈良晒の旧跡であることは、これまで人口に膾炙することが少なかった。また、昭和54年の県指定時から長く連携事業等の機会がなかった奈良晒保存会各団体が席を同じくし、交流をはかる機会となったことも本展示の成果として挙げることができるのではないかと思う。

※木村博一『近世大和地方史研究』和泉書院 2000年
芳井敬郎『織物技術民俗誌』染織と生活社 1991年

常設展「昔のくらし」リニューアル — 成果と課題 —

茶谷まりえ

(1) これまでの「昔のくらし」

民俗博物館には常設展として奈良盆地の「稲作」、大和高原の「茶業」、吉野山地の「林業」の3つの生業に関する展示コーナーがあり、平成25年10月からは、より身近な衣食住に関する道具や家の中での生活を紹介する「昔のくらし」が加わりました。昔の道具やくらしの移り変わりに関する学習は小学校3・4年生の必修カリキュラムにもなっていて、10月・11月を中心に大勢の子どもたちが遠足や社会見学に訪れます。

オープン当時の展示構成としては、昭和30年代の居間の再現や冷蔵庫、暖房器具、アイロン、明治期からの子どもの勉強道具や日用品、玩具（ベージュマ、めんこ、おはじき、紙風船、水鉄砲、凧など）の展示、たらいや洗濯板、回転ごたつ、炭火アイロン、羽釜、飯びつ、下駄、わら草履、印半纏、電気扇風機、火吹き竹などの体験コーナーを中心に約70点の資料を紹介していました。（「民俗博物館だより」vol. 40参照）

私は平成27年より民俗博物館の一員となったのでオープンには携わることができなかつたのですが、1年間の展示解説や体験コーナーでの案内などの経験を通して来館される方々の様子を見てきました。その中で、子どもたちの関心が高いコーナーや質問の多い道具を分析しながら様々な課題を見つけることができましたが、常設展という性質と日々の業務に追われてなかなか根本的な改善には至っていませんでした。

そのような時、夏季特別展の開催に伴う展示ケースの



リニューアル前の展示室

大幅な移動を機に、「昔のくらし」を全面リニューアルすることになったのです。

(2) 課題と工夫の日々

リニューアルの計画にあたり、一緒に担当した溝辺悠介学芸員とまず取り組んだのは、先輩スタッフの意見や他館での事例を参考にこれまでの展示の課題を洗い出すことでした。その中であがった課題は、大きく分けて①展示構成の見直し、②キャプション（資料名や使用年代などの書かれた解説パネル）の改善、③体験コーナーの充実の3点でした。

それらを踏まえ、冷蔵庫や電話、暖房器具など小学校の見学に際して外すことのできない資料や博物館のワークシートとの関連性を意識しながら展示構成を考え、わかりやすい表現と字体の大きな文字に読み仮名をふったキャプションに取り替え、子どもが見やすい目の高さや照明の角度、パネルには興味を引くような色使いとイラストを取り入れ、さわることで道具の仕組みがわかるような資料の選定を心がけました。

幾度も意見交換をくり返して出来上がった展示は、再現展示「大正～昭和期の家のなか（土間・板の間・居間）」、身近な道具の変遷をたどる「いろいろな道具のうつり変わり」、勉強道具と玩具を紹介する「子どもの勉強道具とあそび道具」、様々な道具をさわることのできる「昔の道具にさわってみよう!」を中心とした4つのコーナーで構成されています。

その中でも特に工夫を重ねたのが、体験コーナーの充実でした。何度かラインナップは変わっているものの、リニューアル前には前頁でも記したような道具が並べられていました。これらはいずれも使い方や仕組みの解説がありませんでした。もちろん昔の道具にさわるとは貴重な経験になるでしょう。けれども、その道具の使い方を知らない子どもたちにとってはさわることがゴールになり、そこから学べることはぐっと減ってしまいます。「さわること」と「体験すること」には大きな差があるのだと感じました。

しかしながら、展示室ですべての道具を実際に使うこ



再現展示

とはできません。そこで、できる限り「疑似体験」に近づけるように工夫を重ねました。例えば、メモを取りやすい端的な解説のキャプションを子どもの目の高さに合わせて設置し、しゃがんだ状態で道具をさわったりスケッチをしたりしやすい温かみのある木製の展示台に道具を並べるようにしました。

また、一見すると関連性の無い道具がランダムに並んでいるように感じられますが、それぞれをよく見ていくと、体験する時の“動作”によって材質・仕組み・使い方がわかるような道具を選んであり、異なる役割を持ちながらも同じ仕組みが取り入れられていることに気づくことのできる道具もあります。例えば、炭火アイロンと回転ごたつはそれぞれ用途が異なりますが、どちらも炭であたためて使う道具です。また、回転ごたつと昔の懐中電灯「がんどう」はどちらにも火が下に落ちないように容器が回転する仕組みが取り入れられています。道具と道具の組み合わせによっても、新しい発見や深い学びにつながると考えたのです。

このような試行錯誤を経て、ようやく9月末にリニューアル後初めて小学校の団体見学を迎えました。

(3) 子どもたちに向き合って

展示のリニューアルに合わせて、受け入れ体制やプランニングも見直しました。民俗博物館の展示解説には、「キュレーターガイド」(学芸員による館内巡回型の展示解説)および「フロアサポーター」(ボランティアガイドのスタッフを交えた「昔のくらし」を中心とした体験指導と質問対応)という2つの形式があります。前者は平成24年、後者は平成27年から導入したものです(「民俗博物館だより」vol. 41参照)。小学校の団体見学はそれぞれ社会見学、遠足、校外学習など目的は様々ですが、平成29年1月末の時点で60校が来館し、そのうち54校に解説を実施し



道具の変遷を紹介する展示

ました。また、先方がキュレーターガイドを要望されない場合でも、フロアサポーターとして体験コーナーでの案内を中心に見学をサポートできるように体制を整えました。

小学校の団体見学はどうしても日程が重なりやすいのですが、昨年度まではほとんど時間をずらすことなく同時刻に複数の学校が入館している状況が多々ありました。これは見学の充実度や利便性の低下に直結しており、動線が混乱したり解説・誘導の声が届かなくなったりするといった問題が発生しました。そこで、本年度は、学校の協力のもと入館時間と古民家の見学時間をできるだけ重ならないように設定し、じっくり見学できる環境づくりに努めました。本来はごく当然のことなのですが、最も多い時では午前中に7校の予約が重なる繁忙期に少ない人員で適切な環境を保持することは非常に難しく、深刻な課題でした。しかし、この小さな工夫によって見学の体制はかなり改善することができました。

展示解説の内容は学校の要望や課題などに合わせて異なりますが、子どもたちにとって最も身近なテーマである「昔のくらし」への関心は自然と高くなります。そのため、先生方や子どもたちのリアクションは非常に貴重な「資料」であり、展示解説を通して様々な気づきがありました。

例えば「いろいろな道具のうつり変わり」コーナーでは、展示ケースごとにテーマとなる道具があり、右に展示してあるものから左へと進化していく流れや道具の関連性が伝わらず、戸惑う様子が見られました。そのため、矢印のアイコンを設置して視覚的に理解してもらえる工夫を加えたり、展示ケースに小タイトルのパネルを取り付けたりするといった対策をおこないました。

また、最もこだわってきた体験コーナーでも大きな課題が生まれました。まずは子どもの目の高さに合わせたはずの解説パネルに目が行かないということ、そして、展示し

た資料は子どもたちにとっては私たちの想定以上に親しみの薄いものだったということでした。例えば、比較的身近なものだと思っていたダイヤル式の黒電話ひとつをとっても、実際にはダイヤルを回す以前に受話器をあげることからわからない子どもも多く、これまでの解説がいかに伝わりづらいものであったかを痛感しました。これらの気づきから、あらためて「子ども目線」を考え直し、より資料に近い場所にイラスト付きの使い方パネルを設置するようにしました。

考えに考えたりリニューアルでしたが、実際に見学の様子を目の当たりにすると課題はあちこちに山積みで、現在も子どもたちを迎える度に反省と改良を重ねています。今後はワークシートや解説の補助パネル等の教材づくりや昔のあそび体験コーナーの充実などを通して、さらなる磨き直しを図っていきます。

(4) 一歩先の学びへ

「昔の暮らし」は、小学校3・4年生のカリキュラムとの関連性および団体見学を意識したものであるため自然と子どもを意識した展示構成になっていますが、もちろん一般の来館者にとっても面白くて見やすい展示であらなくてはなりません。しかしながら、キャプションの文字の大きさや字体、読み仮名、わかりやすい表現の解説、はっきりした色使い、設置する位置や角度などの工夫は車椅子を利用されている方や視力の弱い方への配慮とも重なります。つまり誰もが親しみやすい展示づくりにもつながる普遍的で重要な課題なのです。

リニューアルに際して民俗博物館の良い点・悪い点に向き合い、博物館における“真の体験”とはどのようなものなのか追究してきましたが、自分の身体で本物にふれることは全てのスタートであると考えます。急速にデジタル化・ファスト化される昨今の社会に生きる私たちにとって、わ

ざわざ足を運ばなくては見られないものは少なくなってきているでしょう。けれども、博物館では「本物」から様々なことを学ぶことができます。館内で展示している資料はもちろん、民俗博物館のまわりには多数の古民家があります。博物館で得た知識や記憶と古民家での経験や感覚が重なり、自らのくらしと照らし合わせることで真の体験への入り口になるのです。博物館では、展示や催しによって古民家とのリンクを強化することで体験と体験を組み合わせた一歩先の学びを模索していく必要があります。

今回のリニューアルを通して、展示とは学芸員が一方向的に提供するものではなく、来館者と一緒に磨かれていくものなのだと感じました。博物館を単に道具の名前や使い方を知るためだけのものではなく、その背景にある物語、そして自分自身にとっての“生きる力”を学ぶための場所にしていきたいと考えています。



井戸とお風呂の展示



小学生の見学の様子



体験コーナー

みんなく春夏秋冬

平成28年度の活動報告

【展示】

1. 企画展

■特別展

奈良さらし ～南都の名産ここにあり～

*「奈良さらし」展開催実行委員会共催展
南都随一の名産と謳われた「奈良晒」を通して近世の優れた麻織物文化の一端を紹介。

・7月23日(土)～9月4日(日)

I「布に秘められた技」

会場：民俗博物館 (1,607名)

・10月1日(土)～12月4日(日)

II「まぼろしの布をもとめて」

会場：公益財団法人名勝依水園 寧楽美術館
(14,252名)

〈関連催し〉

・7月24日(日)

ワークショップ「みる・さわるー麻の教室ー」

講師：近世麻布研究所所長 吉田真一郎氏
様々な古布をさわり、比べることから、麻織物の多様さ、豊かさを実感する。(57名)

・7月31日(日)

学芸員トーク「奈良さらし」

企画展「奈良さらし～南都の名産ここにあり～」

・8月27日(土)・28日(日)

奈良県指定無形文化財奈良晒の紡織技術(実演と体験)

協力：坂西麻布奉職所

月ヶ瀬奈良晒保存会

奈良県の貴重な文化財である奈良晒の紡織技術について理解を深め、今日まで受け継がれてきた優れた技を実感していただく。糸作り体験や機織り実演。また、27日には特別実演として、奈良晒の仕上げ工程「布巻き」実演を実施。(2日間のべ213名)

・9月4日(日)

ワークショップ「大和機に迫る」

講師：澤田絹子氏
「大和機」を取り上げ、講師の実演、参加者が実際に機の前に座って織ってみる体験などを交えてその特色について紹介。道具が伝統産業に果たした役割について考える。

・10月8日(土) ※名勝依水園で実施
ワークショップ「奈良さらしー伝統を受け継ぐー」

講師：株式会社岡井麻布商店 岡井孝憲氏
文久3年創業以来、現在も手織り布の伝統を受け継ぐ奈良晒の織元が語るその歴史と今日、未来。作品、道具の展示と織り、へそ巻体験も。(29名)

・10月22日(土) ※名勝依水園で実施
特別講演会「奈良さらし まぼろしの布をもとめて」

講師：近世麻布研究所所長 吉田真一郎氏
30年以上に及ぶ近世麻布の収集、調査・研究成果に基づき、布に触れる体験も交えながら、その魅力を語る。(53名)

・8月27日(土)・28日(日) ※名勝依水園で実施
奈良県指定無形文化財「奈良晒の紡織技術(実演と体験)」

協力：坂西麻布奉職所

月ヶ瀬奈良晒保存会

奈良晒ゆかりの地、依水園で「奈良晒の紡織技術」の保存・継承に長年取り組む月ヶ瀬奈良晒保存会の活動を紹介します。糸作り体験、奈良晒の仕上げ工程「布巻き」特別実演も実施。(両日合計63名)



布巻きの実演(名勝依水園・寧楽美術館会場)

□昔のくらし関連展

・4月29日(金・祝)～6月26日(日)

「くらしの中の動物たち」

様々な道具を通して、くらしの中でのいろいろな動物との関わりについて紹介する展示。(2,845名)

・10月1日(土)～12月4日(日)

「境目をのぞいてみればー時と場所の民俗ー」

私たちの暮らしにリズムを与える「時」の区切り、普段何気ない空間の中で時に応じて明示される「場所」の区切り(境目)をとらえる。(5,620名)

□季節展

・平成29年2月25日(土)～3月26日(日)

「ひなまつりー人形たちの宴ー」

桃の節供に因み、当館が所蔵する雛人形を展示。節供、年中行事の風習と込められた意味を知る。

2. コーナー展

- ・ 5月3日(土)～7月3日(日)
「男の子のまつり」
- ・ 8月6日(土)～28日(日)
「戦時下の暮らし」
- ・ 12月10日(土)～平成29年2月5日(日)
「結ぶ」

3. 玄関ホール展

市民との連携展示。当館玄関ホールで、市民の文化活動の成果を公開。

- ・ 9月11日(土)～25日(日)
「竹の作品展」 矢田の里たけのこクラブ
置物、ランプ、玩具など竹製の様々な作品を展示。古くから器や置物として人の生活に深く関わってきた竹に親しみ、楽しんでもらう。
- ・ 10月29日(土)～12月11日(日)
写真展「第6回私がつらえた大和の民俗」
奈良県内の民俗行事を中心に撮影をおこなっている写真家ら11名による競作展。6回目の開催。「住」をテーマに、単なる建物ではなく人の生活と息づかいを宿す“器”としての姿を写し出す。

4. 館外での展示

- ・ 2月18日(土)～3月5日(日)
「古民家でひなまつり」
協力：たけのこ工房 藪田照澄氏
民俗公園内、旧白井家住宅で雛人形を展示。
- ・ 10月18日(火)～10月30日(日)
写真展「私がつらえた大和の民俗」 テーマ：「衣」
当館で平成27年度に実施した写真展を奈良県立図書館情報館で開催。



玄関ホール展（竹の作品展）

【普及・教育】

1. 連続講座

実技講座「大和機で麻布を織る」(連続講座22回)

平成28年4月～29年3月(第2・4土曜日)

講師：澤田絹子氏

江戸時代、奈良晒の原料として用いられた苧麻(カラムシ)の繊維を用い、当時と同タイプの紡織用具を用いて布を織り上げる。材料となる苧麻を栽培するところから始め、繊維を取り出し、糸を作り、当地方の特色のある織機(大和機)に糸をかける。

2. ワークショップ・体験学習、上映会

- ・ 5月5日(木祝)
「動物の足あとスタンプでうちわ作り」
「暮らしの中の動物たち」関連催し。大人も子どもも一緒に楽しめるワークショップ。動物の足あとの形のスタンプでオリジナルうちわを製作。(70名)
- ・ 5月15日(日)
国際博物館の日記念ワークショップ
「奈良のハチミツのお話と蜜蝋キャンドル作り」
講師：むろうはちみつ 的場ふく氏
「養蜂発祥の地」といわれる奈良のハチミツの歴史・文化に関するお話を聞いた後、ハチミツの副産物、ミツロウを使ったキャンドル作りに挑戦。(30名)
- ・ 6月5日(日)
「古民家で聞くおはなしの散歩道①」
協力：朗読の会 陽だまり
大和民俗公園内重要文化財 旧白井家住宅で開催。「鑑真和上の姿」「葛の葉狐」等6話(42名)
- ・ 6月12日(日)
「まぼろしの郷土玩具「奈良の竹鹿」を作ろう」
協力：たけのこ工房 藪田照澄氏
矢田の里たけのこクラブ
大阪府立中之島図書館
日本玩具博物館
「暮らしの中の動物たち」でパネル展示した川崎巨泉のおもちゃ絵に登場する奈良の郷土玩具「竹鹿」を実際に製作。(20名)
- ・ 7月30日(土)
「古民家で夏の暮らし体験&ミニ植木鉢の風鈴づくり」
蚊帳や打ち水、葦簀、竹の水鉄砲など、夏を乗り越えるために昔の人々が考え出した様々な道具や工夫を体験し、夏が楽しくなる小さな風鈴を製作。(54名)



「古民家で夏のくらし体験」

- ・ 8月7日(日)
おはなし会「語り継ごう、戦争」
 協力：朗読の会 陽だまり
 コーナー展「戦時下のくらし」の関連催しとして、戦争にまつわるお話を開催。(16名)
- ・ 8月20日(土)
「作ってあそぼう!竹のおもちゃ」
 協力：たけのこ工房 藪田照澄氏
 矢田の里たけのこクラブ
 竹でおもちゃを手作りして遊ぶ催し。(46名)
- ・ 9月18日(日)
「竹の工作教室」
 協力：矢田の里たけのこクラブ
 卓上型の置物を作る体験を通して竹という素材に親しみを感じていただく。(19名)
- ・ 10月30日(日)
映像上映会「境をまつる」
 奈良県教育委員会が企画・制作した『大和路の文化財』より2作品を上映。
 ①「境をまつる」(平成5年) 上映時間20分
 ②「稲作とまつり」(昭和62年) 上映時間20分
- ・ 11月6日(日)
「古民家で聞くおはなしの散歩道②」
 協力：朗読の会 陽だまり
 大和民俗公園内 旧白井家住宅にて実施。「百羽のツル」「すみ鬼にげた」ほか2話(20名)
- ・ 11月20日(日)
「古民家の解説ツアー」(関西大学教授 森隆男氏)
「古民家座談会—住をめぐる奈良の民俗—」
 旧白井家住宅に写真家たちが集い、奈良の民俗について語り合う。午前中に、民俗公園内の古民家のみどころ解説ツアーを開催。(20名)

- ・ 12月18日(日)
「結んでかわいい里山のリース」
 講師：西田貴之氏
 民俗公園の小枝や木の実でリース作り(14名)
 - ・ 12月24日(土)
「結わえて作るハレの日の箸置き」
 学芸員によるコーナー展関連ワークショップ。水引を使って、お正月など、おめでたい日の食卓を彩る箸置きと箸袋を製作。(10名)
 - ・ 1月22日(日)
「ふわふわ毛糸で奈良組紐のストラップ作り」
 講師：ならくみひも鳳美(鳳美氏)
 伝統的な組紐の技術を応用して、可愛い毛糸のストラップを製作。(30名)
 - ・ 3月5日(日)
「早春おはなし会—おひなさまの前で—」
 協力：朗読の会 陽だまり
 「古民家でひなまつり」の関連催し。旧白井家住宅に飾られているおひなさまの前での朗読会。「ひなまつりにおひなさまをかざるわけ」ほか。
- 3. 学校・博物館等への協力、連携**
- (1) 出張講座など
- ・ 4月22日(金)
 平成28年度ユーラシア研究センター研究会
 「大和の織物業について」
 - ・ 5月14日(土)
 奈良学園奈良文化女子短期大学奈良文化論
 第8回「人の一生—民俗のまなざし—」
 - ・ 9月11日(日)
 式年遷宮記念せんぐう館
 「麻について—技術の視点から—」
 - ・ 11月6日(日)
 大和郡山こどもの食を考える会
 「稲作について」
 - ・ 12月4日(日)
 大東市立歴史民俗資料館
 特別展「よみがえる平野屋新田会所」関連講座
 - ・ 12月10日(土)
 大東市立歴史民俗資料館
 特別展「よみがえる平野屋新田会所」シンポジウム
 - ・ 12月10日(土)
 京都府立山城郷土資料館
 「奈良さらしと山城—その歴史と特徴—」

- ・3月11日(土)
葛城市歴史博物館
「大和緋について」

(2) 展示解説

- ・4月6日(水)
奈良文化女子短期大学 114名
- ・4月15日(金)
奈良工業高等専門学校 45名
- ・4月20日(水)
奈良県立西の京高等学校「地域創生コース」40名
- ・5月18日(日)
奈良大学通信教育部 87名
- ・5月28日(土)
京都市立芸術大学美術学部 142名
- ・6月3日(金)
奈良県立法隆寺国際高等学校 42名
- ・6月4日(土)
帝塚山大学文学部文化創造学科 14名
- ・6月25日(土)
奈良大学文学部文化財学科 15名
- ・10月8日(土)
龍谷大学文学部歴史学科文化遺産専攻 49名

(3) フロアサポーターサービス

小学校の団体見学に対して学芸員、ボランティアがサポート。展示品の解説だけでなく子供たちの質問への応答、ワークシートによる学習や体験コーナーでのお手伝いなど。*要予約 (54件)

(4) 研修・実習(職業体験、博物館実習など)

- ・10月4日
大東市立歴史民俗資料館〈学芸員研修〉 11名
- ・11月16日(木)~18日(金)
奈良市立富雄南中学校〈職業体験〉 1名

(5) 資料貸出

- ・チョワナ、千歯扱き、籾篩、米俵、俵編器ほか〈展示〉
「稲作のある暮らし」展 「鹿の舟」 繭
- ・一升枧、矢立、竿秤、一斗枧、物差し 〈教材〉
教育支援施設適応指導教室「いきいきホットルーム」
- ・糸車 〈教材〉
1年生国語科授業 大和郡山市立矢田小学校
- ・糸車 〈教材〉
1年生国語科授業 奈良学園小学校

(6) 特別閲覧・写真撮影・写真提供、出版掲載など

- ・渡邊辰一郎『裁縫教科書巻之一』〈特別閲覧・撮影〉
- ・「天保銘唐箕」 〈写真・データ提供、掲載〉
- ・「旧吉川家住宅」 (掲載)
株式会社エディキューブ
『完全保存版江戸の食とくらし』(洋泉社)
- ・川西町唐院 川船1点 〈特別閲覧・実測・撮影〉
- ・原稿執筆・監修 〈名義使用、執筆〉
『(仮題)日本の麻布』(近世麻布研究所)
- ・備中鋤、ふみ車、千歯こき、唐箕 〈掲載〉
有限会社オフィス・イデオム
『ヒストリカ』(学研プラス)
- ・備中ぐわ、長床犁、踏車、千歯こき、唐箕〈掲載〉
奏コミュニケーション
『江戸時代のサバイバル』(朝日新聞出版)
- ・絵馬(ハート・十六目) 〈掲載〉
安井真奈美
『モノと画像から探る妖怪・怪異の東西』
(勉誠出版)
- ・晒用白 〈特別閲覧、写真撮影、実測〉
- ・大和高田市曾大根「四季農耕図絵馬」 〈掲載〉
公立大学法人奈良県立大学ユーラシア研究センター
「EURO-NARASIA Q」第6号
- ・シビグツ 〈掲載〉
山川出版株式会社
『祭礼で読み解く歴史と社会 春日若宮おん祭りの九〇〇年』
- ・犁、馬鋤、足踏水車、千歯扱き、唐箕、ほか〈掲載〉
有限会社奏コミュニケーション・株式会社ウィル
『プロに聞く!米づくりのひみつ第3巻米とくらし』学研プラス
- ・唐箕 〈データ提供〉
- ・農具、紡織用具 〈特別閲覧・写真撮影〉
砺波市立砺波郷土資料館
- ・奈良晒帷子 〈映像使用〉
NHK 奈良放送局
「ならナビ・春日野だより~奈良晒~」
- ・写真資料「竈を使う」 〈パネル展示〉
明石市立文化博物館
企画展「くらしのうつりかわり」

奈良県立民俗博物館だより Vol.42 No.1(通巻108号)

2017(平成29)年3月24日発行

編集発行 奈良県立民俗博物館

〒639-1058 大和郡山市矢田町545番地

TEL 0743-53-3171 / FAX 0743-53-3173

印刷 株式会社アイプリコム

〒636-0246 奈良県磯城郡田原本町千代360-1